

米欧亜回覧

第83号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

グラランド・シンポジウムの成功のために

実行委員長 塚本弘

二十周年記念のグラランド・シンポジウムがよいよ間近になってきました。

今回のシンポジウムの開催に当たっては、二年以上前から、議論を積み重ねて来ましたが、準備に開られた全ての皆さんに改めて感謝するとともに、最後のひと踏ん張り、参加者の勧誘、当日の配置体制、シンポジウムの議論の充実などに一層のご尽力をお願いしたいと思います。

これまで、米欧亜回覧の会は、五周年、十周年の際にも、シンポジウムを開催しましたが、今回のシンポジウムの最大の特徴は、会員のみなさんが、発表をする点です。特に、初日の午後は、「知られざる岩倉使節団の群像」というテーマの下に、十三人の使節団員について、その後の人生も含め、それぞれが国造りに如何に貢献したか、そして成し遂げた光だけでなく影の部分にも触れた発表があります。

もう一つの特色は、講師の方々と事前の念入りな勉強会(本セミナー)の開催です。二日目の「日本近代百五十年を

考える、「もう一つの道」を問う」では、どこで日本は道を踏み誤ったのかについて、何回も会員同士はむろん講師の先生方々とも議論を重ねて来ました。

三日目の「志民の創る 地球時代の日本の未来像」でも、講師の先生方との打ち合わせや、ボランティア活動の方々とも議論をし、日本の未来像を考えて来ました。

こうしたこれまでの議論の結果を踏まえて、わが国のこの百五十年の歩みを振り返ると

ともに、世界とともに今後日本がどのような未来を構築すべきか、大いに論じ合う場としたいものです。



宇宙飛行士ウォルター・シラーは言っている。「宇宙から見ると国境なんてどこにもない」と。

実現出来るのはご同慶の至りです。

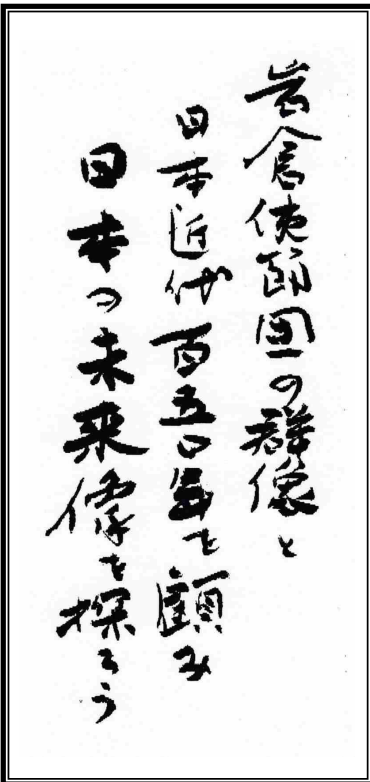
会としては、五周年、十周年に継ぐ三回目のシンポジウムですが、今回は多くの一級のアピニオンリーダーや専門の先生方に加えて、有意義なNPO活動を実践している方々のお話や、多数の会員による研究成果発表など、従来になかった特色を盛り込むことが出来ました。

ぜひご友人・知人を多数お誘いいただき、シンポジウムの趣旨を世に問うとともに、賑やかに会の設立二十周年をお祝いしましょう。

最後になりましたが、昨夏と今夏に実施した二泊三日の合宿検討会をはじめ、準備作業を分担していただいている実行委員会ならびに有志メンバーの皆さんのご尽力に心から感謝申し上げます。

全員で盛り上げよう!

二十周年の年を迎えて、いろいろのことが想い出されます。設立当初、泉さん・故水澤周さんのリードで多田幸子さんの庭のみえるサロンで始まった「実記を読む会」や、松井千恵先生肝入りで調布の百合学園等で開催した一日がかりの「スライド上映会」、海外からも多くの研究者をお招



実行副委員長 岩崎洋三

きした五周年記念や十周年記念の「国際シンポジウム」、二〇〇〇年ベルリンで開催された「日独交流史展」岩倉使節団への参加などなど。

岩倉使節団の世界史的意義と地球時代の日本の未来像

歴史的な大転換点となった明治4年の岩倉使節団から150年、日本は成功と失敗を繰り返しながら西洋的近代化を進めてきました。しかし文明の豊潤な果実は偏在し、人間らしい生活を奪われている人々が増えています。本シンポジウムは、志ある人々が集い、歴史から学び、地球時代の日本の未来像を探ろうとするものです。 米欧亜回覧の会代表 泉三郎

2016年12月2日(金)、3日(土)、4日(日) 東京都千代田区一ツ橋 学術総合センター

グランドシンポジウムに向けて 準備状況の報告

事務局長 近藤 義彦

グランド・シンポジウムの準備は三段階で行われた。

- 一、基本の方針の決定
- 二、会員同志の研究会
- 三、外部講師を招いての研究

そして、実行委員会が結成され、講師の先生方との部会での討議、個別打合せ、運営細目調整など、準備が様々な形で行われた。左記はその一部である。

●全体例会 記念事業プロジェクト立ち上げと芳賀徹先生講演 (2015. 7. 26)



2015年7月 全体例会

- 山中湖夏合宿での討議 (2015. 8. 25)
- 総会での全体質疑(日比谷図書文化館 (2016. 4. 17))
- ウィリアム・ステイール先生 (5. 16)



2015年8月 山中湖合宿

- 成田龍一先生 (7. 12)
- ピーター・マクミラン先生 (7. 16)
- 芳賀先生・五百旗頭薫先生との打合せ (8. 17)
- 八王子セミナーハウスでの夏合宿 (8. 22~24)



2016年8月 八王子合宿

- 堀内正弘先生(グローバルJAPAN) (9. 10)
- プログラム打合せ (10. 4)
- 岩倉使節団の群像発表リハーサルなど (10. 17)

グランドシンポジウム 第一日目担当

歴史部会 小野 博正

■国家と音楽―久米邦武と伊澤修二にとって 西洋音楽とは何であったか(奥中康人氏―静岡文化芸術大学教授)

六月二十日開催、出席者二十四名。

『実記』は、明治初期の日本人が初めて西洋音楽に接したときの記録としても読むことができる。とくに、ポストンで岩倉使節団一行が足を運んだ「太平楽会 World's Peace Jubilee and International Musical Festival」というコンサートへの久米邦武の反応は、注目されてきた。

このテーマに関しては、中村洪介氏の論考(『西洋の音、日本の耳 近代日本文学と西洋音楽』(一九八七))が知られている。中村は、かれらが訪れた「太平楽会」で演奏された曲目を明らかにし、「太平楽会」記事と照合しつつ分析をするのだが、結局のところ、久米の西洋音楽受容に対する中村の評価は否定的なものだった。とりわけ「太平楽会」記事の末尾にある「愛国心」に関するくだりは、「見当外れの感動」だとさえいう。しかし、丁寧に整理すると、中村の結論はい

ささか性急だったと言わざるを得ない。

中村は、久米が会場で手に入れ、日本に持ち帰ったプログラム(久米美術館所蔵)に基づいて、演奏曲目を確定したようだ。だが、当時の新聞や音楽新聞など、複数の情報を照合すると、このプログラムの記載事項は必ずしも正確ではなく、実際には構成や曲目が異なっていた。ここで詳細を説明することはできないが(拙著『国家と音楽』参照)、少なくとも、久米の「愛国心」に関するくだりは、軍楽隊が(英国国歌)と(星条旗)を演奏し、会場にいる数万人の聴衆が熱狂したことに対してのものであり、決して「見当外れの感動」ではない。当時の知識人にとって「愛国心」の涵養は重要な関心事であり、これが唱歌教育へとつながってゆく。

また、「太平楽会」前半に登場する「謡婦」(ソプラノ歌手 Peschka-Leutner)について、中村は、モーツァルトの歌劇《魔笛》のアリアが歌われたと推測したが、実際に歌われたのはHeinrich Proch (1809~1878) の(Deh, torna mio bene)であらう。この曲を聴くと、従来は常套句的な言い回しにすぎないと否定的に評価されていた久米の音楽記述は、実は楽曲の展開に即し



6月20日 奥中康人氏

■安場保和―地方行政のキーマン(芳野健二氏)

九月十二日開催、参加者二十名。

一、安場保和は坂本龍馬や井上馨らと同年で、近代政治思想の祖である横井小楠の第一の弟子として熊本で生育し、維新の時も東海道鎮撫総督の参謀として江戸開城の勝・西郷会談にも立ち会った。

二、維新後は地方行政のキーマンとして明治二年の胆沢県(岩手)の大参事を皮切りに、明治三年に熊本県の大参事を務めた。

三、そして明治四年には、大蔵租税権頭として大久保を補佐する形で岩倉使節団に加わる。しかしアメリカでの滞在が長引く中で、「人民の膏を絞った租税を僕のような者の洋行に消費するに忍びず」と一人帰国を決意する。(久米の後日談)

四、帰国後ただちに待っていたかのように福島県令に三年半、愛知県令を五年務める。その後元老院議員を経て福島

県令を六年半、そして貴族院議員ののち北海道庁長官を一年歴任して死を迎える。文字どおり地方行政に身を捧げた後半生と言える。

五、その間の業績として、最初の胆沢県では貧しい少年の後藤新平と斎藤実らを見出しバックアップする。後藤はのちに彼の娘を妻にする。福島では地租の緩和や安積開発(疎水開削も)や病院設立を、愛知では同じく地租の緩和、明治用水開通、病院設立を、福岡では民権派の県議と対立しつつ九州鉄道の発足に力を注ぐ。残念ながら最後の北海道では死の直前もあつてか、あまり成果をあげられなかったようだ。明治の3大県令として京都の植村、新潟の楠本とともに名を残した。

六、興味ふかいは安場を有名(フェイマス)な県令とすれば、同じ年令の三島通庸もまた有名(ノトリアス)な県令として名を残した。

七、なお明治四年の廃藩置県は、当初三府プラス三百二県からスタートし、七十二県となり、明治九年には三十五県、明治二十二年には四十三県となりほぼ今日の姿に着地したのである。(芳野 健二)

■林董、箱館戦争捕虜から外交の主役へ(岩崎洋三氏)
九月二十日開催、出席者十名。

林董の活躍は多岐に渡るが、朝鮮、清国、ロシアとの関係が流動的な時期の外交分野での活躍が特に目立つ。明治二十四(1891)から明治四十一(1908)まで、外務次官・駐清・駐露・駐英特命全権公使、最後は外務大臣として、日清戦争から日露戦争に至る間の外交の難題に直面し続け、外交キャリアは通算十八年に及んだ。特筆すべきは、駐英特命全権公使として、日露協商を指す伊藤博文の抵抗を凌いで、英国外相第五代ランズダウン公爵と交渉の末、明治三十五年(1902)一月「日英同盟」を締結し、ロシアの脅威に備えると共に、日本の国際的地位を高めたことであろう。

このようにダイナミックに活躍が出来たのは、父親で順天堂を創設した蘭方医佐藤泰然から蘭学の薫陶を得たこと、林が十二歳のとき横浜に移住し、翌年その居留地に開設されたヘボン塾で、ヘボン夫人から三年間みっちり学び、早くから英語・欧米事情に通じていたことが大きい。

岩倉使節団に同行した久米邦武は、林を「英語に巧者で西洋通の第一」と評し、林と親交のあった福沢諭吉は「学者風人物」と評していた。

林は慶応二年六月(十六歳)に幕府英国留学生として

渡英するが、同行した十四人の内初めから英語が話せたのは林だけだった。英国留学二年足らずで戊辰戦争が勃発したため、学半ばで帰国を余儀なくされると、明治元年(1868)六月横浜帰着と同時に林は榎本武揚の品川脱走に同行することを志願し、旗艦開陽丸の見習士官として箱館戦争を戦った。

敗戦投獄後、政府軍参謀黒田清隆に新政府での活躍を囁望され明治三年(1870)四月禁錮を解かれる。きっかけは、品川脱走に際して外交団長老のパークスに宛てた文書の林による英訳がネイティブ並みとパークスが評価した評判を黒田が知ったことだった。出獄後は数少ない洋学に通じた俊才として要人に見込まれ、陸奥宗光の紀州藩藩政改革に招かれ、伊藤博文には岩倉使節団随員・工部大学校設立の機会を与えられた。

多忙の合間に、多くの洋書の翻訳・刊行をこなしていたのも驚異的だ。外人記者が「一流の英語」と評し、久米邦武が「林の口訳は書き取りが追いつかないほど早い」と嘆いた英語力で、米欧の自由主義思想家の著述から、ローマ史論やマホメット伝(岩倉使節団英国滞在中、依頼で口訳)、刊行はしなかったが陸奥の和歌山行に同行した際に

は紀州藩軍制改革のため「軍略の書一部」も翻訳していた。(岩崎 洋三)

は紀州藩軍制改革のため「軍略の書一部」も翻訳していた。(岩崎 洋三)

グランドシンポジウム
第二日担当
近代史研究会 山田哲司

近代史研究会の活動報告
(七月、九月)

近代史研究会は「人物論・時代論」シリーズとして、去る七月二十八日、国際文化会館において、第三十三回研究会を開催した。テーマは「満州国と『226事件』」、報告者は古海建一氏(前国際善隣協会会長、ご尊父は元満州国総務部次長)、香田忠雄氏(元オーストリア大使、元通産省、226事件遺族会会長、本会会員)の二氏、今回は、昭和十年前後の「時代論」の報告となったが、本件にご遺族として関係深いお二人の報告により、満州国および226事件の実態、その後の評価・検証などについて、より深い知見に接することができた。

本研究報告会は近代史研究会の幹事メンバー八名を中心に、十一名の方々により、昨年五月以降一年二か月をかけて開催された。テーマの内訳は人物論二十九回、時代論四回となっている。今回の三十三回目終了ということとするが、日本近現代史百五十年

を辿る報告としては、時間的制約もあり、採用人物の範囲、時代背景となるテーマ等を十分に考慮したとはいえず、今後の検討を俟とうと思う。

研究報告会と並行して行われております本セミナーでは、瀧井一博教授の第一回に続き、第二回目として、七月十二日成田龍一 日本女子大教授に「日本近代における『大正時代』の意義」、第三回目として、九月二十七日、中島岳志 東京工業大教授に「近代日本のナショナリズムとアジア主義」のテーマで講演をしていただいた。成田教授は「大正時代」を年号の範囲を超えて、明治、昭和に及ぶ幅広い時代と捉え、時代背景の共通性に言及され、また、中島教授はナショナリズムの形を明治維新の時代から現代にいたる長いスパンで検討され、それぞれ多くの新しい見方を示す示唆に富む講演だった。場所は国際文化会館、参加者はそれぞれ約二十名を超え盛会だった。

今後、近代史研究会は上記報告者による報告の要約(各約三千字、三千五百字)を作成し、これらをもとに、シンポジウム当日の報告者によるリハーサル、講師の先生方との意見交換をして行く予定である。(山田 哲司)

グランドシンポジウム
第三日目担当

グローバルジャパン研究会
塚本弘

■持続可能な社会とは？ナショナル・トラスト協会(事務局長 関健志氏)

六月十四日開催。ナショナル・トラストは、市民や企業から寄付金を集めて、国民の財産として残すべき重要な自然や歴史的な環境を、買い取りや保存契約などによって後世に引き継いでいく活動である。約百年前のイギリスで発祥し、日本では1964年に鎌倉・御谷(おやつ)の森がトラスト運動で守られたのが最初である。以来、知床や天崎、柿田川など五十以上の地域で各トラスト団体が多彩な活動を展開している。トラスト運動の広がりを受けて、全国的なトラスト運動を推進するため、当協会が1992年に設立された。

自然保護のための土地の確保という公益性の高い取り組みは、本来であれば公有地化や保護区の設定などを通じて行政が取り組むべきものであるが、財政上などの限界もあり、民間のトラスト運動がそれを補う重要なものとなっている。また近年では、山林を手放す地主が増え、水源林が外国資本に買われているとい

う危機を訴える報道により、土地を買い取って守るトラスト運動への関心や注目が集まっている。

国土の約二十%を占める自然草原や自然林のうち、国の法律によって保護区として自然が確実に守られているのは、国土の五%しかない。希少な生き物の絶滅を食い止める、日本の豊かな自然が失われるのを未然に防ぐため、トラスト地という民間の保護区を拡大していくことが急務となっている。

近年、トラスト運動等の推進の重要性を記す法律の制定や、トラスト運動を支援する金融商品の開発、遺産を自然保護に役立てる動きなどが活発になっており、トラスト運動に対する社会的なニーズや関心の高まりがみられる。当協会は全国組織として、日本全体でこの運動をさらに進めていくために、全国のトラスト団体と連携して、トラスト地のさらなる拡大はもちろんのこと、法的な支援確立のための働きかけや普及啓発に努めていきたい。(関健志)

■The Charms of Japan 三祝
◇日本 (Mr. Peter MacMillan)

七月十六日開催。マクミラン氏はアイルランド生まれ、杏林大学客員教授、東京大学非常勤講師を務める傍ら、日本と世界をつなぐ架け橋とし

ての活動を展開している。また、翻訳家としてまた、アーティスト(雅号は「西斎」)として活躍中である。

講演は日本とアイルランドの文化には、古代から現在に至るまで、多くの類似があり、その例を紹介するところから口火が切られた。その中の一つが詩歌が重んじられている点である。両国には古くからたくさん詩歌が残されている。初めて来日した時ショックを受けたのは、日本と西洋の文化・美意識の違いであった。西洋では「完全さ」「永続性」「合理性」などが価値観の中心にあるが、日本のそれは「部分から全体を暗示させるような不完全さ」「四季折々移ろいゆく儂さ」「口には出さないが心で愛でる、奥ゆかしさ」、

「和」が重んじられるが、西洋の哲学の根底にあるものは「正義」である、等々。在日期间も二十年を超え、自分はこれから先、住むべき場所はアイルランドか日本か、迷っていた時に「百人一首」に巡り合い、英訳する事によってより日本人の心をより理解できるだろうと、「百人一首の英訳」をライブ・ワークに決める。その花が開くのは2008年春 One Hundred Poets, One poem Eachをロンドンピア大学出版局より出版さ

れ、同年ドナルド・キーン日本文化センター日本文学翻訳特別賞を受賞する。更に今年の九月には伊勢物語の英訳「The Tales of Ise」をPenguin Booksから出版。

講演会の中で、伊勢物語や小倉百人一首の和歌を数多く取り上げ、表面的な意味と、裏に隠された意味とを英訳を交えながら非常に解りやすく解説された。参加者も昔の受験勉強時代を思い出すかのようになり、「掛詞」「比喻」や「同音異議語」等、また西洋の思想・哲学とは全く異なる「美」や「善」に対する普遍性について聞き入っていた。講演の中で説明を受けた和歌の中から一つだけ氏の英訳と合わせ紹介する。

由良の門を渡る舟人楫を絶えゆくへも知らぬ恋の道かな
會禰好忠(そねのただよし)
(百人一首)

Crossing the Straits of Yura the boatman lost the rudder.
The boat's adrift not knowing where it goes.
Is the course of Love like this?

氏は「日本語の和歌は非常に難しいので英訳の方がより理解しやすい、是非そちらを読んで下さい」と自己PR、会場はドット湧いた。講演の最後は「自分は伊勢物語や百人



7月16日 Mr. Peter MacMillan

一首の英訳を通じて日本の良さをこれからも世界に発信していきたい、日本に来て「縁」ができたこと大変うれしく思います、あなた方と出逢えたことに感謝します」と締め括られた。

(文責) 畠山 朔男

■世界の中の日本の役割五百旗頭真氏

七月三十日開催。

冷戦後四半世紀だが、日本には、不思議な再生バネがあるようだ。未曾有の東日本大震災も何とか乗り越えつつある。個人としても、阪神大震災で家が全壊し、東日本大震災では復興会議の議長を務め、さらに、熊本に行ったら、三度目の大地震に遭遇。復興会議では、毎週土曜日に五時間の会議で大議論。後藤新平も、関東大震災の後、復興院を作り大改革を進めようとしたが、地主が政友会に働きかけて猛反対。民政党も取り込まれ、復興院の事務費がゼロ。内務省の復興局を中心

に何とか進めた。東日本大震災でも、「復旧」ではなく「復興」ということで、高台移転、復興増税、多重防衛などを打ち出した。

歴史を遡ると、683年に白村江で大敗した後、唐を学習し、平城京を開き、鑑真を招いた。薩英戦争の敗北から、砲術を学び、砲台を設置した。アメリカの日本史研究者ヒュー・ポートン教授は、「戦闘の後、平和を迎える国民」と日本人を洞察。今、世界は乱世。二つのフアクターが懸念。イスラムと中国。岩倉使節団は、日本人の輝かしい資質を発揮した。外部文明を学ぶのは、自信がなければできない。西欧に行つて、近代化は始まってまだ四十年、キヤッチアップは可能と見抜いた。タイのチュラロンコン大王も、十代のとき、即位を遅らせて西欧に学んだ。今の中国は、鄧小平の韜光養晦の教えを忘れ、慎ましやかではない。先程、エズラ・ボーゲル教授と偶然会った。「鄧小平までのリーダーは、外国経験があつたが、今は、それがないので心配」とのこと。

う。太平天国の乱も十五年ぐらい。二十年ぐらいで治まるかも。中国は、強権国家で、戦前の日本の路線を引き継いでいるので、手強い。アメリカ、英国の内部からの瓦解が懸念。トランプはレーガンに似ているという人もいるが、レーガンは明るかった。英国は、2010年に首相の解散権を制限したのが失敗。日本の強みは、安倍首相の在任期間が長くなり、既に六十五ヶ国を訪問し、トップとの信頼を築いたこと。今後、ロシアとの交渉で、齒舞、色丹を返還させ、国後、択捉は、継続交渉という形にして、活動圏とすればいい。(文責)塚本弘

■日本をほぐす私シエア奥沢活動から学んだこと(堀内正弘氏—多摩美術大学教授、シエア奥沢オーナー)

九月十日開催。

講演は鶴見俊輔の「限界芸術論」、マズローの「人間欲求五段階説」等の人間行動の基本理念についての説明からスタートした。これらは地域社会の人間の交流が生まれるきっかけをデザインする時の基本的なコンセプトであり、「空き家」活用のモデルケースになっている。「シエア奥沢」の「人が集まる場作り」の基本的理念になっているという強い印象を受けた。「空き家」は、2013年の政府の住

宅土地統計調査によれば、八百二十万戸で、総住宅数の55%を占めている。2033年には住宅の三軒に一軒が空き家になるという衝撃的な予測をZIC(野村総研)が発表している。「空き家」を有効な資産として再生させるような仕組みを整えていくことが日本にとって急務になっている。

堀内先生は世田谷区にある自宅の別棟を改修して「シエア奥沢」を立ち上げ、「地域の居場所」、「地域の交流の場」として三年前から運営、活用してきている。現在は、多くの趣味の団体、クラシック音楽やオペラを楽しむ会、種々のコンサート、地域包括ケアサービス、コワーキンググループの活動等多方面の活動に利用され、「空き家」の活用事例として大成功しており、主要メディアがその活動を紹介したので、全国的に注目されている。

堀内先生は「シエア奥沢」の成功事例をシエア・ハブ(SHARE・HUB)として、そのノウハウを公開、共有し全国に広げていきたいと考えているように感じられた。

「日本をほぐす」の講演を聞いて、これは「戦後七十年で硬直化した日本社会をもっと柔軟な、個人が生き生きとした地域社会を再生するためのソーシャルイノベーション(社

会改革)を目指している」と強く感じた。(文責)小泉勝海

■第二百六回



実記を読む会報告

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@icom.home.ne.jp

開催、第一部巡覧ノ記上・中・下)

使節団は、六月九日(陽曆)「連邦政府の招待で接待係メヤー將軍の案内により北部名所を遊覧すべく、ワシントン議事堂北の駅から寝台車二両で出発」し、

ニューヨーク、ナイアガラ、ボストン等を巡覧六月二十二日払暁ワシントンに帰着した。同行者は岩倉大使、木戸副使、山口副使、肥田理事官、田中光顕理事官、久米、畠山、林董、森弁務少使、サンフランシスコ領事ブルックス他だった。副使の大久保と伊藤は信任状取付のため一時帰国中で参加していない。

六月十日付ニューヨークタイムズは、使節団一行の北部巡覧予定の概要に続けて、「この旅行の終わりまでに日米間の条約は完成しているだろう」と条約改正交渉の樂觀的な見通しを報じたが、期待に反して、大久保・伊藤が信任状を得てワシントンに帰任

した七月二十二日に条約交渉は打ち切られる破目になった。

最初の訪問地ニューヨークでは、「鉄柱を以て支持して、鉄道を街上二丈余の上に架設し、蒸気車を往来する棧橋あり」と大通りの左右に高架鉄道が走る様に驚愕している。アメリカの鉄道総延長は1830年に四十マイルに過ぎなかった、1850年には3,168マイルに達していた。岩倉一行の乗ったボルティモア・オハイオ鉄道(B&O)はその嚆矢で、ワシントン北駅は1835年に完成しており、リンカーン大統領の就任式や葬儀にも使われていた。

次の訪問地ウェストポイント陸軍士官学校で兵器や訓練を見学した後、ナイアガラで瀑布を観光した後、フィルモア元大統領と会食。ペリー来航時の大統領フィルモア氏は地元出身でバツファロー大学共同設立者になっていた。一行はその後保養地サラトガ、時計で有名なウォールサムを経てボストンを訪問する。

同地ではThe World's Peace Jubilee and International Musical Festival (普仏戦争の終結に伴い世界に平和が甦ったことを祝う「太平洋樂会」)開催中で使節団二日間通い、ヨハン・シュトラウス等の指揮で本格的西洋音楽に

接した。久米は「謡を善くするもの一万六千人、堂中は五万人を容て尚余地あり」と驚愕し、「珠玉盤に迸り、金石みな鳴る」など詠嘆調で延々と西洋音楽の素晴らしさを記述している。それまで音楽に無関心かと思われた久米も豹変せざるを得なかった模様だ。使節団はこの後ニューヨークを再訪し、ワシントンに戻った。(岩崎 洋三)

■第二百七回

九月二十三日開催、第十七章ワシントン後記、第十八章フィラデルフィアの記、第十九章ニューヨークの記。

現代語訳を中心に原文の一部を輪読する。1872年六月二十二日、二度目のワシントン入り後、八月一日ニューヨークからボストンに向かう約四十日、時に気温が38℃に達する最中、主にワシントンで過ごす。この間条約改正に必要とされた天皇の全権委任状下付を受けるため大久保、伊藤が三月日本に向かい、七月に帰着。各国の干渉等もあり、七月二十二日、米国との条約改正交渉は打切られ、使節団はグラント大統領と会見、米

国出發を告げる。ワシントン滞在中、米議会も夏季休会中、一行は大久保、伊藤の帰着まで無聊の時を過ごす。

第十七章で、久米は先ず南部各州の農業事情(タバコ、

米、綿花、サトウキビ、養蚕)について詳細に記述するほか、合衆国共和制とドイツ領土制を対比して両国とも国内的には封建制度下にあると見、南北戦争の要因として関税法と奴隷制廃止について各州間の深刻な対立に起因したこと、保守の共和党が奴隷制廃止を提唱する一方、民主党が反対だったことなど、国情は複雑に入り組み、理解は容易でない。南北戦争後、政府は財政改善のため軍備削減に努め、新たに物品税を設け尽力中のこと、戦争中の英国との戦艦アラバマ事件の係争にもふれる一方、欧州諸国が表面中立を装いながら南軍への加担を伝える。

また当時、大統領選挙中であり、予備選挙からグラント大統領選出までの動静を伝え、現在進行中の米大統領選と軌を一にする。久米は「西洋人は其持論を達するに畢生の精神を尽くす」と米大統領選挙と政治制度に着目した。

フィラデルフィアには二泊し、米独立宣言がされた議事堂、広大な市中公園など見学。米英の国民性比較、米欧の都市比較を行う。ニューヨークも二泊で、聖書協会(出版社)、百貨店、新聞社、大学等見学。聖書協会では、一行は漢訳聖書を各一冊提供されるとともに、本章で

儒教、仏教とキリスト教とを比較した宗教論、さらに合衆国論を展開。現在も一読に値する記述に思われた。報告では、当時の米ジャーナリズムと現代の米新聞・雑誌の発行状況を対比してアメリカ社会の変化に触れたほか、カキ養殖とカキ料理が度々供された記録を興味深く読む。

なお、本年が江戸期に來日したケンペル没後三百年を覚え、ケンペルとヨーロッパの日本観について、クライナーの著書を基にケンペル『日本誌』の一部抜粋を紹介し比較文明論の一助とした。(大森 東亜)

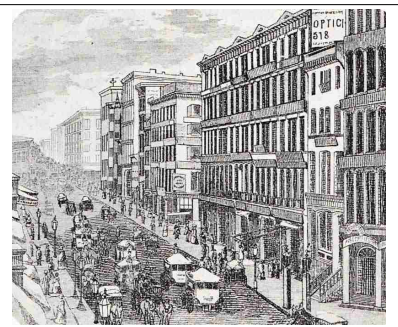
■第二十五回

Sir Ernest Satow,
A Diplomat in Japan 輪読会
担当幹事 岩崎洋三
Tel 080-7959-4332
iwasakiyz1116@gmail.com



六月十五日開催、Chapter 26 The Bizen Affair (備前事件 1868・1・11) 備前事件と神戸事件としてより広く知られている。また、サトウは一名のアメリカ人水兵が備前藩兵の隊列を横切つて射殺されたことに端を発した紛争であると記述しているが、実際にはフランス水兵が横切つていて、槍だけが水をさされたが殺されてはいない。これはサトウの記述が不

正確であることの一例である。これにより、外国軍隊が一時神戸中心部を占領し、下級の備前藩士滝善三郎ひとりに一切の責任を負わせ、切腹を命じ、この犠牲のうえに維新冒頭の危機を切り抜けた。ブリタニカによると「従来は、明治維新直後の攘夷衝突事件とされていたにすぎないが、明治政府が幕府に代つて列国と対外交渉にあつたのはこの事件が最初であり、これを機に明治政府は、鎖国攘夷の旗を降ろして開国和親のたてまえを世界に公表することになり、国際社会にその存在を認知させることに成功した。」



ニューヨークのブロードウェイ (『実記』)

この幕末政治の激動の渦中、サトウは神戸事件の争闘に英警備隊と参戦、薩摩藩士吉井などから鳥羽伏見の戦況を聴取し、パークスの指示の下、各国公使団と東久世との会見を斡旋するとともに会見に同席し通訳にあたる。薩摩・岩下、寺島、長州。伊藤、土佐・後藤などと応接し、情報活動を活発に展開する活躍ぶりである。こうした政治状況下、サトウは大坂から屋形舟で京都へ向かい、伏見に一泊して相国寺に入る。京都では薩摩藩主(忠義)、西郷、土佐・後藤などと会い備前事件(神戸事件)の懲罰のこと、英議会制度など話し合う。長州・桂(木戸)薩

走。一月十一日、26章Bizen Affair (神戸事件)があり、一月十五日、東久世(参与・外国事務取調)はイギリスをはじめとする各国公使団と会見し、新政府の樹立を告げる。

■第二十六回

七月十三日開催、第27章 First Visit to Kyoto サトウの京都初訪問記。承前、慶応四年一月三日(西暦一八六七年一月二十七日)鳥羽・伏見の戦いが勃発、翌四日大勢決し、薩摩・長州軍の優勢判明。徳川慶喜は大坂城を退去し、江戸に敗

この幕末政治の激動の渦中、サトウは神戸事件の争闘に英警備隊と参戦、薩摩藩士吉井などから鳥羽伏見の戦況を聴取し、パークスの指示の下、各国公使団と東久世との会見を斡旋するとともに会見に同席し通訳にあたる。薩摩・岩下、寺島、長州。伊藤、土佐・後藤などと応接し、情報活動を活発に展開する活躍ぶりである。こうした政治状況下、サトウは大坂から屋形舟で京都へ向かい、伏見に一泊して相国寺に入る。京都では薩摩藩主(忠義)、西郷、土佐・後藤などと会い備前事件(神戸事件)の懲罰のこと、英議会制度など話し合う。長州・桂(木戸)薩

摩・大久保(参与・内国事務係)など新政府要人とも応接する。一月三十日(2.23)、徒歩で伏見まで、夜川船で大坂へ戻る。西郷から縮緬二巻、餞別として進呈される。洛中の描写は相国寺と二条城程度で、大坂城の焼け跡が詳細。

今回サトウの説明が時間的に前後し錯綜するため主要事件とサトウの動静を対比した年表抄を一瞥した後、輪読。併せ鳥羽・伏見の戦いを日本史文献により検証した。

(大森 東亜)

■第二十七回

九月二十一日開催、28章「瀧善三郎の切腹と御門との謁見交渉」と29章「堺事件」。

前者は備前事件の解決を扱った、後者はサトウ本人の経験ではなく伝聞を記したものである。新政府によるこれらの事件の処理が拙速であったが故に、たとえ一時的ではあれ京都内で尊攘感情が高まりを見せ、後のパークス襲撃事件に繋がったのではないかと、という問題を提起した。

備前事件を発端に兵庫が混乱状態にある中、新政府を作るといつても何の挨拶もないことをパークスになじられた伊藤俊輔は慌てて「王政復古の国書」と「開国和親の布告」を「拵へた」のであった。朝廷では備前事件の解決に苦慮し、

岩倉は備前藩主池田茂政に、池田は家老日置帯刀にそれぞれ苦渋に満ちた書翰を送っている(岡義武「維新直後における尊攘運動の余炎」)。結果「宇内の公法」に従って「外国の儀」は処理するという方針の下で、瀧善三郎が一人全責任を負い従容として切腹するのであるが、サトウとミッドフォードはその厳肅な様式美に深い感動を覚えた。その間朝廷内は中山慶子(明治天皇の生母)を筆頭に御門の謁見には大反対の騒動が湧き起こっていた。(東久世通禧『維新前後』)

ともかく、二つの事件共に列強の主張を唯々諾々と受け容れた新政府の態度は、尊攘派を刺激することになり、その一端を「剣影録」という文書を示すことで例証した。

(赤間 純一)

i-café-music@シエラ奥沢

音楽で巡る 岩倉使節団の米欧回覧「総集編」

シエラ奥沢に場所を移したi-caféは、今回で十三回目を数え、地球を二周りしたことになるので、「総集編」として使節団訪問各国の音楽を中心に据えた。

第一部「映像とお話」は、DVD「使節団出発」上映後、会員の吉原重和氏が使節団員で帰国後初代日銀総裁になった吉原重俊が普仏戦争観

戦武官団として明治三年渡欧した際に、フランクフルトのナウマン社に委託していた明治通宝(ゲルマン紙幣)印刷状況を視察したことなどを、続いて、ゆうきよしなり氏がボローニヤで開催された国際絵本展など現代のイタリア回覧の興味あるお話を、共にパワーポイントで披露してくれました。

第二部「ミニ・コンサート」

「i-Cafe Strings」の木潤、柳沼悠、田中美衣、関谷卓人のみなさんによるドルザークの「弦楽四重奏アメリカ第一楽章」で幕開け。次いで当会お馴染みのソプラノ森美智子さんと武藤弘子さんに当時の歌を植木園子さんのピアノ伴奏で歌っていただいた。おোসザンナ(米)、殖生の宿(英)、オ・シャンゼリゼ(仏)、故郷を離るる歌(独)、ともしび(露)、フニクリ・フニクラ(伊)、ウイーンわが夢の街(奥)などなど。i-Cafe Singersの畠山・吉原・岩崎もソプラノの応援を得ながら「ヴァージニア懐かしき我が家」などを披露した。

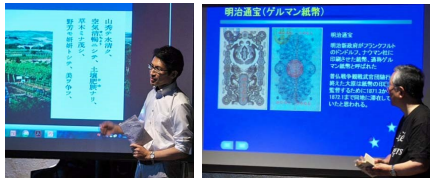
歌に隠れた歴史も面白い。「89年にフォスターが作曲した「おোসザンナ」は、ゴールドラッシュの聖歌と云われるほど大いに流行り、フォスターが最初のプロ・ソング

ライターに転向する機縁になったこと、州歌だった「ヴァージニア懐かしき我が家」が奴隷制度を肯定するとして州歌の地位を「シェナンドー」に譲ったこと、「フニクリ・フニクラ」は、ヴェスビオ火山にトマス・クック社が敷設した登山電車(Funicolare)の営業不振を救った世界最初のCMソングだったことなど。

第三部「交流会」

シエラ奥沢のキッチン・マスタリーが用意してくれた訪問各国に因んだ料理と、お祝いに提供されたシャンパンで話が弾んだが、ヴァイオリンの田中美衣さんがお仕事絡みの犯罪者更正のお話をされ、浮れてばかりもいられなかった。締めくくりに実行委員長の塚本さんに十二月シンポジウムのPRをしていただいた。

(文責) 岩崎 洋三



i-café-music@シエラ奥沢「総集編」

関西支部報告
担当幹事 難波 康熙
namba@jttk.zaq.ne.jp



■第九十一回
七月十三日開催、出席四名。第三編(巻)の第5巻(編)の「白耳義(ベルギー)国」

一八三一年に制定されたベルギー王国憲法は、国民主権や王権の制限などの規定が盛り込まれ、立憲君主制憲法の模範となるものとなった。

岩倉使節団の十年後、一八八二年に伊藤博文が欧州の憲法などの調査のため訪問した国として、ドイツ、オーストリア、イギリスと並んでベルギーも対象としている。立憲政体を担保する「三権分立、議会制、人権」の三本の柱を中核とするベルギー憲法をベースとして、君主大権を拡大すると同時に政府機能重視のドイツ憲法を見做う方向に進む結果となった。

絶対的王権支配を否定したフランス革命から僅か百年後に、遙かに離れた東洋の日本に、「三権分立、議会制、人権」の政治形體である立憲君主制が、ベルギーという小国を通じて、形は変えながらも定着したことは瞠目に値するものと考えられる。

(難波 康熙)

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」事務局担当 古俣美樹
〒190-0001
東京都立川市若葉町 4-25-1-30-102
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL/FAX 042-537-8869

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込(振込)をご利用ください。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2016年11月～12月の予定です

☆設立20周年記念 グランド・シンポジウム

テーマ：岩倉使節団の世界史的意義と

地球時代の日本の未来像

第1日：12月2日(金) 10:00～19:00

岩倉使節団は明治国家に何をもたらしたか

～その光と影

〔基調講演〕芳賀徹(東京大学名誉教授)

「日本近代史における岩倉使節団の意味」

第2日：12月3日(土) 10:00～18:00

日本近代150年を考える～「もう一つの道」を問う

〔基調講演〕保阪正康(日本近現代史研究者)

「日本近代150年をどう見るか」

*レセプション 18:30～20:30

第3日：12月4日(日) 10:00～19:00

志民の創る 地球時代の日本の未来像

〔基調講演〕五百旗頭真(熊本県立大学理事長)

「世界の中の日本の役割」

〔講師〕

ウィリアム・スティー爾、五百旗頭薫、マーティン・コルカット、瀧井一博、成田龍一、中島岳志、楠綾子、山折哲雄、橘木俊詔、福川伸次、近藤誠一、アレックス・カー、藻谷浩介、星野恵美子、川口加奈、堀内正弘

会場：学術総合センター中会議室・一橋講堂
千代田区一ツ橋2-1-2

会費：各日 2,000円(学生1,000円)

3日間通し 5,000円(学生2,500円)

レセプション5,000円(参加希望者のみ)

☆歴史部会

日時：11月7日(月) 13:30～16:30

「田中光顕—明治国家の黒幕的巨魁」

講師：小野寺満憲氏

会場：国際文化会館(会費1,000円)

☆グローバルジャパン研究会

日時：11月19日(土) 13:30～16:30

「日本資本主義の功罪」

講師：橘木俊詔氏(京都女子大学客員教授)

会場：国際文化会館(会費1,000円)

編集後記

◇いよいよグランド・シンポジウムまで一か月と迫り、本号のトップページが少し変則の構成となりました。続く大半一色となりました。続く大半のページは、従来の部会活動に加え、設立二十周年記念事業の企画・準備に如何に多くの会員が幅広く行動してきたかを証しているように思います。一人でも多く学術総合センターに来られることを願います。

◇シカゴ在住の村井さんのおかげでホームページの刷新が進み、グランド・シンポジウムの情報も掲載していきます。また、申し込みもできますので是非いちどご覧になってください。

◇泉代表保管の資料をデジタル化する事が幹事会で決定され、このたび多田直彦幹事の尽力により完成しました。DVD「岩倉使節団の世界一周の旅」の写真や泉氏のナレーション(音声)のデジタル化。「実記」の銅板画や挿絵などのデジタル化です。
データは事務局に保管管理され、希望の映像や音声があれば連絡してください。明治維新から百五十年、デジタル社会の到来は早かったのでしょうか、それとも遅かったのでしょうか。(N)